

荒川洋治「眼帯」論

吉田敬

眼帯

昔というものは一段高いところにある

戦地から帰ったばかり
ロウソクをさがす

三〇分ほど大地は古代を通過し 電気は戻る

子供のころ電気がよく消えた

戦争もすっかり終わっていたので

桃子夫人とぼくは いっしょに柱時計を眺めた

「停電」で町全体が突然

袋に入る

一週間に一度 草の林とぼくの家は真っ暗だ

桃子夫人は「どうしよう、また停電」と

心配そうに真っ黒のなか

紫の眼帯のまま 横になる

桃子夫人の夫である、ぼくの叔父は

同じクラスの友子が詩を読みたいというので

日本の詩歌の二七巻「現代詩集」を

池袋「ばるこ・ぱろうる」で買った

女学生が詩を読んでどうするのと思ひ

ぐずぐずと友子に渡したら……

実はぼくは渡さなかつたのだ

友子がくるまでにまだ時間があると思つて

ぼくが 読みはじめた

おもしろい

六四人の昭和・現代の詩人が数編ずつ読めて

天野忠「米」とか木原孝「声」とか

これまで読めなかった関根弘「民衆駅」とかもどんどん
読めて

阪本越郎の「文章」など半分しかないようなへんな詩
までみんな読めて

(友子にあれを見られたらはずかしい)

友子のあれを見るのは友子がはずかしいが

詩を読むのはほくがはずかしい

と思ひ、)

池袋の喫茶店のなかで

ほくは動かなくなってしまうのだ

真性の日常でも見つけたように

停電という事態に、叔父はあわてる

戦争中の軍隊で凄惨な目にあい、あるいはあわせてきた彼にとって

(満州の中国人たちが首を切られ

白い板の上にそれを並べた写真が叔父の引き出しのなかに

あったのを

従姉妹たちの目が見つけ、一〇数枚は一〇歳のほくを捕囚にした)

戦後の停電なんてたいしたことではないのだ

たいしたことではないのに

感情や反応のようすが ならぬかにつながり

同じ村の切り株のように

そろっているのである

命を落としかねないものと命運ふくらむ(まだ若い桃子さんのそばで)

ものとは この世界では接続しているのか

停電のたび。空いた茶碗のように不思議だ。女の眼帯だ。

なにかが

ものをいおうとしている

いおうとしている前に

いおうとしているものが

また ある

友子、これ、いいよ

なんかおもしろい詩みつけたら

現代詩の文庫が四年前から出てるから

田村隆一、た・む・ら・り・ゆ・う・い・ち

と読むの、いろんな人が「やはり」出ていくから

「いろんな人？ みんな詩人なの？」

うん……ゆくゆくはみんなそうなるの

そうなる人だけでも

そうさせられるの

いつまでも眺めている

ために

理由もないのに色を噴く

それから黙って友子に「現代詩集」を渡し
彼女は「うれしい、ありがとう」と言葉を残し

残したうえで

トントンと

あたりを靴でたたいて立ち去ろうとする

国電か？

「歩くの。馬場まで

歩くの」と、

生まれたばかりの赤い唇が笑っているうちに

はくの姿も見えなくなった

朝になると桃子夫人は「でもね」と笑って

まだ四〇代の夫のネクタイをよりわけ

「でもね」とまたいう

今度は 夫の自転車を引き出し 自分の靴を出し

「でもね」と

水のように言葉を切って

夫の顔の影で 甘くなった眼帯をかけなおす

半分の視界が

「また消えたよ」とぼくが追いかけるようにいう
え？

「おばさん、そこは夜だよ。また停電だよ」とぼくはいう

でも

「ううん。歩きなの。眺めていくの」と

桃子さんはい

はくの姿も見えなくなった

初 出 「現代詩手帳」 一九九七年一月号 思潮社

テキスト 「空中の茱萸」 一九九九年一〇月 思潮社

はじめに

「眼帯」は、荒川洋治が第五一回読売文学賞を受賞した詩集「空中の茱萸」（一九九九年一〇月 思潮社）一六編の詩のうち、「完成交響曲」に次いで二番目に置かれた作品である。初出は「現代詩手帖」（一九九七年一月号 思潮社）で、彼が四八歳、円熟期の作品である。

「眼帯」に引用されている日本の詩歌二七卷「現代詩集」^[1]は、中央公論社から一九七〇（昭和四五）年三月に刊行されたもので、掲載されている作品はいわゆる「戦後詩」と呼ばれるものである。荒川洋治は一九四九（昭和二四）年生れの戦争を知らない世代であるが、戦争にかかわる作品が比較的多い。それらは幼少期の戦後の記憶をもとに場面を設定し、幻想を交えたフィクションとして構成されたものである。戦後半世紀をかなり過ぎた現在、「現代詩」が戦争とどうかかわることができるかを問うものでもある。本稿では作品の構成に注目しながら意味のかかわりを考察する。

「眼帯」という詩は三つの意味の側面から構成されている。

第一は「昔」と「いま」を軸にする時空間で、「ぼく」が子供のころの停電にまつわる物語と、「ぼく」が学生の時の詩の専門店^[2]にあるこ・ばらうる」での物語から成り立っている。この二つの物語は全く異なった話題であるが、相似形の構成となっている。また「ば

く」が子供のころの物語が主体となっており、「ぼく」が学生の時の物語は入籠になっている。しかも「昔」と「いま」という時間差を置きながら「昔というものは一段高いところにある」という提言で関係づけられている。

第二は暗黒と色彩の二つの観念^[3]からなる空間である。暗黒が象徴する戦争の恐怖と死に對して、色彩が象徴する愛と性の観念にかかわるものである。そして、

命を落としかねないものと命運ふくらむ（まだ若い桃子さんのそばで）ものとは この世界では接続しているのか

停電のたび。空いた茶碗のように不思議だ。女の眼帯だ。

〈三連二二行目―四行目〉

と、対比する観念を空虚な幻想のなかで関係付けている。

第三は現実と幻想のゆらぎの世界である。物語は主人公の「ぼく」という人物の意識に現れた二つの層から成り立っているが、本稿では現実的に見える空間を「現実」と呼び、その空間から遊離したものを「幻想」または「虚構」と呼ぶことにする。

「ぼく」が子供のころの物語は、

子供のころ電気がよく消えた

戦争もすつかり終っていたので

桃子夫人とほくはいっしょに柱時計を眺めた

「停電」で町全体が突然

袋に入る

（一連一行目―五行目）

と過去の現実を基礎にして物語は始まる。「ぼくの叔父は／戦地から帰ったばかり／ローソクを探す」と叔父は生存しているようであると同時に、その叔父は既に戦死していて戦地から帰らないことを暗示しながら物語は進行しており、同時にはあり得ない成り行きを併存させている。

一方、「ぼく」が学生の時の物語では、

同じクラスの友子が詩を読みたいといふので

日本の詩歌の二七巻「現代詩集」を

池袋の「ばるこ・ばろうる」で買った

（二連一行目―三行目）

という現実を基礎にして、友子に「現代詩集」を渡すという場合と、逆に渡さなかったという場面を設定して、やはり矛盾する成り行きを混在させている。

現在と過去、現実と虚構の物語が矛盾を含みながら同時進行的に併存し、交差する構成となっている。「ぼく」が子供のころの物語も「ぼく」が学生の時の物語も、現実と幻想のゆらぎのなかにある。

一、「昔」と「いま」という時空性

「眼帯」冒頭の「昔というものは一段高いところにある」と、終局の「ぼくの姿も見えなくなった」という表現は不思議な言葉であり、同時に詩的雰囲気醸し出している。

入沢康夫は「詩の構造についての覚え書き」（二〇〇二年一〇月思潮社）で、「一編の詩作品の構造を考えるにあたっては、詩人（作者）と、発話者と、発話内容の中心人物（主人公）との三者は、まず第一に区別する方向で意識されねばならない」と述べている。さらに「この三者の関係は、単なる形式上の問題に止まらず、詩の本質的問題と深く不可分からみ合っていて、いわばその解きほぐしの最初の手係りになるはずだと思われるからである」と説いている。「眼帯」が語られている世界はフィクションとしての物語世界である。語り手（発話者）、主人公、その他はすべて仮構されたものである。文頭のこの作品のモチーフである「昔というものは一段高いところにある」という提言は、次に語られる物語内容から少し距離をおいた「語り手」のものである。また、「ぼくの姿も見えなくなった」と、「ぼく」が分裂して「ぼく」の消滅を眺めている終局の設定は、学生の時の主人公の「ぼく」を「語り手」が眺めていることになる。

作品構成としては、冒頭に提言を置き、その後一行空白を挟んだ

七連で成り立っている。「ほく」が子供のころと学生の時という時間差と、物語の現実と幻想の配置は、作品表記上も段差を設けるなどして工夫が施されている。「ほく」が子供のころの物語の一、三、六、七連は一字目から書かれ、「ほく」が学生の時の物語の二、四、五連は、六字下げて書かれていて、提言のように「昔」を見上げる形をとっている。また、「ほく」が子供のころの物語でいままでの語りと質を異にする幻想らしい場面では一字下げにしている。

「停電」で町全体が突然

袋に入る

一週間に一度 草の林とほくの家は真つ暗だ

桃子夫人は「どうしよう、また停電」と

心配そうに真つ黒のなか

紫の眼帯のまま 横になる

〈一連四行目〜九行目〉

「ほく」が子供のころとほぼ同時期の「ほく」が一〇歳の時の、叔父が持ち帰ったとする中国人の凄惨な写真を従姉妹たちと覗き見る連は、叔父の幻想場面から外れ、「ほく」が見た経験として二字下げて書かれている。

真性の日常でも見つけたように

停電という事態に、叔父はあわてる

戦争中の軍隊で凄惨な目にあい、あるいはあわせてきた彼にとつて

(満州の中国人たちが首を切られ

白い板の上にそれを並べた写真が叔父の引き出しのなかに

あったのを

従姉妹たちの目が見つけ、一〇数枚は一〇歳のほくを捕囚

にした)

〈三連一行目〜六行目〉

同様に「ほく」が学生の時の物語では同じクラスの友子に『現代詩集』を渡したとするが、実はほくは渡さなかつたとする虚偽としてのくだりはその位置からさらに二字下げにしている。

女学生が詩を読んでどうするのと思ひ

ぐずぐずと友子に渡したら……

実はほくは渡さなかつたのだ

友子がくるまでにまだ時間があると思つて

ほくが 読みはじめた

〈二連四行目〜八行目〉

そして、「それから黙つて友子に『現代詩集』を渡し」と齟齬の生じるところでも同じように二字下げにしている。

そうなる人だけでも

そうさせられるの

いつまでも眺めている

ために

それから黙って友子に『現代詩集』を渡し

彼女は「うれしい、ありがとう」と言葉を残し

残したうえで

トントンと

あたりを靴でたたいて立ち去ろうとする

〈四連八行目―五連五行目〉

このように、異質な場面を設定する際注意を促すメッセージとして段差が設けられている。

この物語の時空間における基本軸の「いま」とは、「眼帯」が執筆された、作品の初出当時の一九九七年あたりであり、「ぼく」が学生の時とはそれよりおよそ二五年前の「現代詩文庫」

（思潮社）が刊行され始めて四年後の一九七二年あたりと考えられる。

〈「ぼく」が子供のころ〉とは一〇歳の時とはほぼ同時期としてさらに一五年前と推察される。

文章の時制に注目すると、子供のころの物語では「子供のころ電気がよく消えた」へ一連一行目、一（満州の中国人たちが首を切ら

れ／白い板の上にそれを並べた写真が叔父の引き出しのなかにあったのを／従姉妹たちの目が見つけ、一〇数枚は一〇歳のぼくを捕囚にした）へ三連四行目―六行目、「ぼくの姿も見えなくなった」へ七連七行目へなどのように現実らしく思われる表現は過去形で記されている。同様に「ぼく」が学生の時の物語では、日本の詩歌二七巻『現代詩集』を「友子が来るまでにまだ時間があると思って／ぼくが読みはじめた」へ二連七行目、「ぼくの姿も見えなくなった」へ五連一〇行目と過去形で表された現実として描かれており、すべて「ぼく」の記憶なのである。それらの現実が続く「ぼく」が子供のころの物語の二つのありようも、学生の時の物語の二つのありようも、架空上の成り行きであることが読みとれる。

子供のころ電気がよく消えた

戦争もすっかり終わっていたので

桃子夫人とぼくはいっしょに柱時計を眺めた

〈一連一行目〉

戦後庶民的な家庭の夜、夕食後床につく前の手持ちぶさな時間であろうか、時代的にもテレビなどはなく、時計を眺めていると突然停電になる。戦後のある時期停電はよく起こり、あわててロースクをさがす場面は当時としてありふれた光景であった。また、窓ガラスから夜の景色を覗き、近所に明かりのついていないことを確か

めながら奇妙な安堵感を抱いたり、暗闇がいつまで続くだろうと不安を募らせたりしたのである。だが物語では「戦後の停電なんてたいたことはないのだ／たいたことはないのに／感情や反応のようすが　なだらかにつながり／同じ村の切り株のようにそろっているのである」〈三連七行目〉、「はく」の恐怖は叔父に融合し、叔父は停電という事態にあわてる。彼は「戦争中の軍隊で凄惨な目にあい、あるいはあわせてきた」〈三連三行目〉という。停電の闇になることよって、彼の「感情や反応のようすがなだらかにつながる」〈三連九行目〉のである。不安と恐怖のなだらかなつながりは隠喩を用いた「同じ村の切り株のように／そろっているのである」〈三連一〇行目〉、「二行目」と夜の林に浮かぶ樹木の切り株の光景を描いて不気味に表現する。「切り株」は、叔父の引出しのなかにあった「満州の中国人たちが首を切られ、／白い板の上にそれを並べた写真」〈三連四行目〉五行目〉に重なる。一方〈はく〉が学生の時の物語〉は次のように始まる。

同じクラスの友子が詩を読みたいというので

日本の詩歌の二七巻『現代詩集』を

池袋「はるこ・ばろうる」で買った

〈二連一行目〉三行目〉

東京池袋に「はるこ・ばろうる」という詩の専門店がある。級友

の友子が詩を読みたいというので『現代詩集』を買った。中央公論社の『現代詩集』に収められている詩は戦後詩人によるものである。これらの詩は、戦争の凄惨さと戦後の政治的空白時代の生活の哀しみを鋭く描いており、〈子供ころの「はく」の物語〉の叔父の戦争中の軍隊での凄惨な経験とも通底する。

友子、これ、いいよ

なんかおもしろい詩みつけたら

現代詩の文庫が四年前から出てるから

田村隆一、た・む・ら・り・ゆ・う・い・ち

と読むの、いろんな人が「やはり」出ていくから

「いろんな人？　みんな詩人なの？」

うん……ゆくゆくはみんなそうなるの

そうなる人だけでも

そうさせられるの

いつまでも眺めている

ために

〈四連一行目〉二行目〉

「そうなる人だけでもそうさせられるの／いつまでも眺めているために」とあり、詩はいつまでも眺めているために残るとする。級

友である友子は戦後詩人の『現代詩集』を持って、国電に乗らず馬

場まで歩いていくという。いずれの物語も「ぼくの姿も見えなくなった」で終わり、物語が回想であったことを暗示する。

二、暗黒と色彩

桃子夫人と「ぼく」はいっしょに柱時計を眺めたのであるが、停電になって桃子夫人が紫の眼帯をつけたまま横になるまで、「ぼく」と桃子夫人だけの世界のように描かれている。叔父の存在の気配は窺えない。「戦争もすつかり終っていたので」へ「一連」行目」の、「の」は、単にのどかさ、平和的なもの、あるいは時計を眺める以外にない手持ち無沙汰を表すだけのものではない。「時計を眺める」とは時を待つ、帰りを待つことも意味する。つまり、戦争もすつかり終っていたので桃子夫人は（帰らぬ夫）を待っていたとも考えられる。

「停電」で町全体が突然袋に入る

一週間に一度 草の林とぼくの家は真つ暗だ

桃子夫人は「どうしよう、また停電」と

心配そうに真つ黒のなか

紫の眼帯のまま 横になる

桃子夫人の夫である、ぼくの叔父は

戦地から帰ったばかり

ロウソクをさがす

三〇分ほど大地は古代を通過し 電気は戻る

へ「一連四行目」一三行目」

「真つ黒のなか」とは、真つ暗とか暗闇という奥行のあるのではなく、平面的で、現実感の薄い表現である。表記上も一字下げて書かれて区別されており、幻想の世界に塗り込められていくようすがある。戦争もすつかり終っていたのであり、かなり長い年月が過ぎていた。桃子夫人が横になったあと「ぼく」の叔父は戦地から帰ったばかりでロウソクを探す。叔父は停電とともに突如出現してきたように感じられる。また、「真性の日常を見つけたように停電という事態に叔父はあわてる」のである。「真性の日常を見つけたように」とあるのは、桃子夫人が停電で横になったのちの世界は架空の世界であることを示唆している。一週間に一度停電になって真つ黒のなか、桃子夫人は紫の眼帯のまま横になる。

停電は「一週間に一度」という周期的なものではなく、全く突然に見舞うものであった筈である。「停電」で町全体が突然／袋に入る」の袋、停電の「一週間に一度」、桃子夫人が横たわる「真つ黒のなか」、「紫の眼帯のまま」、「桃子夫人の夫である、ぼくの叔父」、「戦地から帰ったばかり」、「三〇分ほど」と、奇妙な表現が埋め込まれており、幻想の中での性的気配が窺える。

桃子夫人が着けているのは白でも黒でもなく「紫の眼帯」である。紫^④という色は一般的に思慮深く高深さをともなう幻想的な印象がある。「紫の眼帯をしたまま横になる」ところから幻想的な印象現実と幻想の世界のなかに性の観念と戦争の恐怖が布石として置かれ、場面は変転して最後には次のようにつながる。

朝になると桃子夫人は「でもね」と笑って

まだ四〇代の夫のネクタイをよりわけ

「でもね」とまたいう

今度は夫の自転車を引き出し自分の靴を出し

「でもね」と

水のように言葉を切って

夫の顔の影で 甘くなつた眼帯をかけなおす

半分の視界が

理由もないのに色を噴く

〈六連〉行目、九行目

朝になると桃子夫人は意味ありげに「でもね」をくり返す。夫を送り出すつもりなのか、懐かしんでいるのか「まだ四〇代の夫のネクタイ」をよりわけける。「甘くなつた眼帯をかけなおす」のは夫の顔の側ではなく「顔の影」である。既に夫は戦地で亡くなつていて考えると、「でもね」という言葉は思い切れない思慕の念か、も

しかしたら生きていくかもしれないという希望を含んだ眩きにも聞こえる。「半分の視界が理由もないのに色を噴く」とは眼帯を外した時の光の眩さの譬えであるが、色を噴くところから、桃子夫人の夫に対する熱愛とも、戦場の火災とも、戦争に対する憤りとも考えられる。そして夫の自転車^⑤を引き出し、過去を眺めていくために外界の闇に逸れて行こうとする。「そこは夜だよ。また停電だよ」と呼びかける「ぼく」自身の姿も見えなくなつて物語は終結する。

三、現実と幻想のゆらぎ

荒川洋治は若い頃、詩人蔵原伸二郎の「壺」という作品に感化された。「壺」は、大昔に作られた壺から作った人が見えてきた、千二百年という大昔から作った人が時を逆に歩き出したというものがある。荒川洋治は「詩人^⑥というのは、フィクションを書く人なのだ」と見た。そしてフィクションを書いても、なんだかしらないが、そのフィクションについて、もうひとつ自信をもてないところがあるのだな、その虚実を分かち切れないところに詩人の思いがある」と考えた。幻想性は、荒川洋治が詩を構成する際の一つの重要な要素として位置づけられている。

同じクラスの友子が詩を読みたいといふので

日本の詩歌の二七巻「現代詩集」を

池袋「ばるこ・ばるうる」で買った

女学生が詩を読んでどうするのと思いが
ぐずぐずと友子に渡したら……

実はばるこは渡さなかったのだ

友子がくるまでにまだ時間があると思つて

ばるこが 読みはじめた

（二連二行目、八行目）

同じクラスの友子が詩を読みたいといふので日本の詩歌の二七巻
『現代詩集』を池袋「ばるこ・ばるうる」で買うが、「女学生が詩を
読んでどうするのと思いがぐずぐずと友子に渡したら」と語り、「実
は渡さなかったのだ」と否定している。そして、「ばるこ」は『現代
詩集』を読みはじめ、あらぬ妄想を抱いて固まってしまう。

（友子にあれを見られたらはずかしい）

友子のあれを見るのは友子がはずかしいが

詩を読むのはばるこがはずかしい

と思ひ、）

池袋の喫茶店のなかで

ばるこは動かなくなつてしまつたのだ

（二連二六行目、二二行目）

「ばるこ」は読み始めた『現代詩集』が「おもしろい／＼六四人の昭

和・現代の詩人の詩が数編ずつ読めて」（二連九行目、一〇行目）

と語る。不幸なかつぎやの女が逮捕されて曳かれる前に、汽車の窓
から雨に濡れた鉄道線路に投げ出された米の悲しみを語つた天野忠
の「米」。立派な新宿民衆駅落成にかかわつて税金の国鉄資本と民
衆の貧しさの落差に憤る関根弘の「民衆駅」。中学生の作文の褒美
に独逸語の辞典を買つたことに当惑する阪本越郎の「文章」。そし
て木原孝一の詩「声」は、死の訪れた町を魂が訪れるようにさまざま
な視角で見つめ、「私たちの町を知っていますか」と問う。

わたしたちの魂が

通り過ぎてきたちいさな町を知っていますか

だれも気づかないちいさな町を

（木原孝一「声」一行目、三行目『日本の詩歌二七』昭和四五年三月中央公論社）
わたしたちの魂が通り過ぎた、だれも気づかない小さな町、住ん
でいた小さな部屋も、犬もみんな消えてしまった。そして苦痛にあ
えくように、断末魔のか細いうめくような声が乳母車のなかから聞
こえてくるというものである。

「ばるこ」は、これらの詩をおもしろく読み進める。だが、詩を読
んでいるうちに動かなくなつてしまふ。『現代詩集』を指すような、
同時に「ばるこ」や友子の陰部を連想するような「あれ」という唐突
な言葉は行き場を失つたまま宙吊りにされる。「友子にあれを見ら
れたらはずかしい／＼友子のあれを見るのは友子がはずかしいが／詩

を読むのはぼくがはずかしい／＼と思ひい)」(二連一六行目〜一九行目)と、不思議な羞恥心を抱いて語りは中断される。その理由を説明する文脈の糸口は見当たらない。

この詩において言葉以外で表すメッセージは、時間差と幻想性や齟齬を示すための段差を設けたところであった。ここで注目されるものは()の使用と、「ぼく」が学生の時の物語が、「ぼく」の子供のころの物語と相似形で入籠になっていることである。

「ぼく」が子供のころの物語の()で括られた箇所は「ぼく」の記憶として三連の

真性の日常でも見つけたように

停電という事態に、叔父はあわてる

戦争中の軍隊で凄惨な目にあい、あるいはあわせてきた彼にとつて

(満州の中国人たちが首を切られ

白い板の上にそれを並べた写真が叔父の引き出しのなかに

あったのを

従姉妹たちの目が見つけ、一〇数枚は一〇歳のぼくを捕囚にした)

〈三連一行目〜六行目〉

と、続く

戦後の停電なんてたいしたことはないのだ
たいしたことではないのに

感情や反応のようすが ならだかにつながり

同じ村の切り株のように

そろっているのである

命を落としかねないものと命運ふくらむ(まだ若い桃子さんの

そばで)

ものとは この世界では接続しているのか

〈三連七行目〜三行目〉

という個所である。()は、一般的には文の途中に挿入して、ある事柄を補説するものである。しかし、ここでは、対応と発展の關係にあるものと考えられる。「ぼく」が学生の時の物語で「戦後詩」を読むことは、「ぼく」が一〇歳の時の従姉妹たちと覗き見た叔父の机の引き出しのなかにあった中国人の凄惨な写真を見たことと、まだ若い桃子さんのそばでという過去の記憶と通底する。

ここで「眼帯」がもつ戦争に対する認識と「ぼく」の過去の記憶の書き方について考察しておきたい。「眼帯」の初出は一九九七年一月号である。一九九一年、三人の韓国人女性が日本政府に第二次大戦中の補償を求める訴訟を起こした。一九九二年・九三年日本政府は「従軍慰安婦問題に関する日本政府の調査結果(第一次・第二次)」を公表した。そして宮沢喜一首相、細川護熙首相、村山富

市首相などが謝罪している。また、中国に関しても一九七二年九月田中角栄、周恩来両首相が共同声明に調印したが、その後も謝罪の表現、教科書、靖国問題等さまざまな軋轢を抱え、一九九五年村山富市首相が日本の加害責任を謝罪した。だが、一九九七年八月南京で「侵華日軍南京大虐殺史国際學術シンポジウム」が開かれるなどした。九〇年代は人権侵害・性犯罪の認識が広まった時代であり、日本の加害責任を問われる時代であった。

〈「眼帯」の語りの現在〉は、一見「ぼく」が学生の時のように見受けられる。しかし、それは「ぼく」の過去の記憶なのであり、物語の「いま」は「眼帯」初出の一九九七年あたりである。〈「ぼく」が学生の時〉は「現代詩集」が面白く読めたのであり、級友の友子に新しく出た「現代詩文庫」田村隆一の詩集を薦めたり、最終的には「現代詩集」を渡すというもので、戦争についての記述はない。〈一〇歳の時の「ぼく」〉はその写真に恐怖を覚えるけれども、加害者側の認識はない。「中国人の凄惨な写真」を見たという記憶は「眼帯」の基本的時間軸の「いま」（一九九七年「眼帯」初出あたり）である。「語り手」の日本の戦争責任の認識を照射させられている。いずれにしても凄惨な写真のリアリティー性は中国人に対する加害を象徴するものである。

一方、「ぼく」と叔母であるはずの桃子夫人と住んでいる不自然な関係は、エディプス性を回避するために父、母の影として叔父と

桃子さんを配置しているのか、作品制作の都合と考えられる。単に叔父ではなく、桃子夫人の夫でもなく「桃子夫人の夫である、ぼくの叔父」と三者の関係をこわっている。また、三連の従姉妹たちと桃子夫人の関係は明らかではなく、「ぼく」とはただ従姉妹の関係である。「ぼく」は叔父の家に遊びに来たようすではなくなぜか母と住まず桃子夫人と住んでいる。「桃子さん」と「ぼく」との関係で血縁性を遠ざける意図が見られる。桃子夫人の魅惑性を「ぼく」は感じている。停電の中の三〇分間は、桃子夫人と突如現れる叔父とで営まれる性的行為が隠されていることも、また同時に「ぼく」が幻想の中で叔父に成り変わることも想像される。「まだ若い桃子さんのそばで」は、「ぼく」が学生の時の物語の友子と対応している。終結部の「現代詩集」を持った友子が消滅する時の生まれかきりの赤い唇はその関係を象徴するものである。

「現代詩集」を読むことよって「ぼく」が一〇歳の時の中国人の凄惨な写真を見た記憶を思い起こす。それは恐怖であると同時に加害の側の恥すべき歴史である。また叔父に成りかわる「ぼく」と桃子さんとの関係は「ぼく」の秘められた欲望であり、ともに戦後の恥ずかしい精神的^{精神的}外傷^{外傷}である。「ぼく」のあれ（恥部）は友子に見られたくない。友子は彼女のあれ（恥部）を見られるのは恥ずかしいに違いない。「ぼく」は詩集を渡そうとして渡せなかった。「ぼく」が「現代詩集」を讀んでいて喫茶店で動かなくなったのはこれ

ら生成された観念によるものである。しかし、「戦後詩」を読んでは戦争を考えることは、ただ「ぼく」だけのことではない。「現代詩集」を手にした友子の「赤い唇」に恥部が生まれる。

これらの意味の連鎖は明確な言葉のつながりで結ばれたものではなく、意味と意味のほのめかしで成り立っているかすかな輪郭である。

四連では全くいままでの話がなかったように、順次出版されるはずの「現代詩文庫」を友子に勧めたのち簡単に友子に「現代詩集」を渡してしまう。

なにかが

ものをいおうとしている

いおうとしている前に

いおうとしているものが

また ある

〈三連一五行目〉―一九行目

不確かな観念がことばに先行して生成され、表現するもどかしさが述べられている。生成される観念は共鳴し、複数の関係する意味が互いにかかわりながら進行する。「ぼく」の二つの物語展開は断片的に連鎖状に生起し、いずれのなりゆきも現実であり幻想である。どちらが先というものでもない。

眼帯は本来眼病などを患った者が目を覆って癒すためのものである。眼帯を着けた眼は視野が遮断されて見えない。「紫の眼帯」で塞がれた眼は見えないのが見えてくる。桃子夫人は眼帯をつけることで現実を直視するのを拒み、夫の生きていることを夢見ているようにも見える。「眼帯」という詩のことばは現実と幻想を組み立てるのであるが、桃子夫人の眼帯をかけた眼の裏側の幻想と、なにもかけない目で同時に見る虚実の不思議に交錯する世界を作り出す。バラバラに提示される虚実分けがたい、相矛盾する局面はゆらぎのなかで意味の関係を結ぼうとする。生成される虚実は人の描く心象にも似てゆらぐ。

「おばさん、そこは夜だよ。また停電だよ」と「ぼく」がいう。「命を落としかねないものと命運ふくらむもの」とは「この世界では接続している」のである。「命を落としかねないもの」、命を落とすものとは戦争である。停電になると桃子夫人は眼帯をつけたまま横になる。叔父は戦地から帰ってきたばかりでローソクを探してあわてふためく。朝、桃子夫人はまだ四〇代の夫のネクタイをよりわけ「でもね」と呟く。夫の自転車を引き出し闇の中へ逸れていこうとする。甘くなった眼帯をかけなおすとき半分の視界が理由もないのに色を噴く。眼帯をはずすわけにはいかない。この愛と性の幻覚も凄惨な戦争も桃子夫人の見る現実と眼帯の裏側にある。

おわりに

「眼帯」の二つの物語のモチーフの事実らしい「子供のころ電気がよく消えた」と、「日本の詩歌二七巻を買った」は過去形で書かれている。それに続く物語の展開はいずれも現在形で書かれており、作者の感情や感想は表現されることなくフィクションとして構成されている。二つの物語は矛盾するそれぞれ二つの成り行きとして同時に進行し、戦争の恐怖と死、愛と性の対立する概念を「命を落としかねないものと命運ふくらむ（まだ若い桃子さんのそばで）ものとは この世では接続しているのか」と、結ぶことよって併存させ意味の拡充を図る。さらに、「昔というものは一段高いところにある」ということばで括られて、つねに眺めていくものであるとする。

荒川洋治は辻仁成との対談で「戦争」について次のように述べている。

そういうふうには、僕なんかの世代でも、もう実際の戦争の雰囲気なんかかわからないわけだけれども、やっぱり過去の自分たちがかわつた歴史に対して、想像でもいいから近づいてみるという、そういうこともひとつしてみなければいけない。それはもちろんさっきのポリティカルな問題でもあるだろうし、あ

るいは言葉をもつ人間として、やっぱり自分と血がつながる遠い日本人がもつた行為とか、あるいは考え方とかを、接続するものとして見ていかなければいけないという気持ちもあるんです。そう考えるときに、やはり戦後詩といつているまさに戦後のな人、あるいは戦後世代の人たちも、概念的には触れていまずけど、戦争についてほとんど触れていない。しかし例えば戦場ひとつ描くこととかね、それが現実の戦場と違ってもいいから、いま自分が日本に生きているこの感じでの振り返り方、あるいはイメージでもいい、そういうたものでやはりいちどキュッと自分のなかで、押さえるべきだなと。

「詩の表現とその可能性」【現代詩手帖】一九九五年一月号 思潮社
すでに第二次世界大戦は過去のものではあるが、「眼帯」は戦争を知らない若い世代にいつまでも忘れてならないものとして、戦争を考へることへ誘うものである。読者に物語の断片をつなぎ合わせ意味を再構築することを委ねている。荒川洋治に先行する戦後詩人は自らの体験や見聞きした事柄を素材にして戦後を語ってきた。つまり、「戦後詩」は基本的に戦争を語るというより、戦争によって被った悲しみの世界を描いてきたと言える。しかし、戦争は加害の悲惨さでもあり、そのことは「戦後詩」において対象化されることになかったと荒川洋治は考えたようである。「眼帯」は日中戦争で中国人の殺戮と残された家族の悲しみを語る。荒川洋治はこの作

品で若い時に受けた「戦後詩」の印象を反芻しながら、二つの事実らしいものを基礎にして、戦争による死の恐怖と愛と性の精神的外傷を構造的に組み立てることによって作品化を試みた。この作品は想像力によって「戦後詩」を補完し拡充する方向で描かれている。架空性は構成によって鮮やかな印象を与える。戦後生れの荒川洋治の戦争の書き方である。

註

(1)「現代詩集」(日本の詩歌 27) 一九七〇年三月 中央公論社。村野四郎はあとがきで次のように解説する。

「この集におさめられた詩人六十四人のうち約半数は、戦後に詩作活動をつづけながらも、戦前においてすでに詩人として出発し、戦時中、戦争という反詩的な大きな圧力を経験してきた詩人たちである。そしてその他は、戦争中幼少のゆえを^{つづ}持って辛くもその暴力をまぬがれたが、かえってその純粋眼に、戦争の力と罪の醜さをとっくりと見詰めてきた人々である。しかしそのいずれにもせよ、これらの詩人たちの作品を通じて感じとられる性格のもっとも顕著な特色は戦争の痕跡であり、それがどのような被害として受けとられたか、またどのような癒着の痕跡をとめているかということであろう。」

(2)池袋「ばるこ・ばろうる」。現在は東京池袋西武百貨店イルムス館三階に詩の専門書店「ばえむ・ばろうる」がある。

(3)聞市や停電は戦後を象徴するものであった。第二次世界大戦後食糧難で聞市が路上に開かれていた。また停電がよく起こった。

(4)稲村耕雄は「色彩論」(昭和三十年三月 岩波書店)で紫の色を品位と

「神秘を表す色としている。荒川洋治は『詩は自転車に乗って』(一九八一年十二月 思潮社)で、「河野裕子の歌に私は「良妻賢母」の血筋を見て少しばかりはがゆくなる。紫のはかまのイメージがつかまどつているのだ」と良妻賢母の色彩として表現している。

(5)荒川洋治はエッセイ集『詩は、自転車に乗って』(一九八一年二月 思潮社)で、「適性の詩人たちがついに発見できなかった星のうちの二つや二つ、「自転車」の上空に見つけることができないものとはかざらない」と、自転車を孤独と希望をつなぐ小さな幻想旅行の小道具として用いている。

(6)荒川洋治「蔵原伸二郎の詩」「人気の本、力の本」一九八八年六月 柳書院

(7)思潮社による出版シリーズ文庫で(第Ⅰ期)の最初は田村隆一詩集(一九六八年一月)であり、順次発刊されている。現代詩文庫(第Ⅱ期)近代詩人篇も発刊されている。

〔付記〕

本稿は平成十六年度広島大学国語国文学会秋季研究集会の口頭発表に基づいたものです。ご指導ご助言をいただいた先生方に衷心より感謝申し上げます。

— よしだ・たかし、本学大学院博士課程後期在学 —